

# 点描ぐんま経済

日銀支店長

見聞録

■150■

今回の私の最後の寄稿だ。しかも150回目の節目に筆を執れる光栄。

10年以上に亘り、読者の皆さまとの交流が継続できていることに心から感謝したい。

先日うれしい出来事があった。随分前の拙文を読んだ方からお褒めの投書をいただいたのだ。いわく、道の駅で買った下仁田ねぎが上毛新聞に包まれており、それを解いて冷蔵庫にしまつ折、私の顔写真に目が止まり読むに至った由。

長らくねぎと接していた私の顔、ねぎの香りのなかで読んでくれた人。

## 活字での濃密な交流

その光景を思い浮かべて吹き出した。これこそ紙と活字での交流の神髄といえる。

昭和の歌にはよく手紙

# 無関心はやめよう

が出てくる。涙で文字がにじんでいたり、左利きの彼の手紙を右手でなぞってみたり、涙で切手を貼ってみたり。

手紙での交流では、どうしても時間的なズレが生じる。気持ちをつづる、投函する、ポストに届く、受け取って読む。どの場面でも少しずつ時間がか

かる。そんな「遊び」のある作業には趣がある。効率性だけを考えればメールにはかなわない。でも保存性の面ではどうだろう。和紙は千年単位で情報を保存できるが、電子情報は、ソフトウェアや媒体の更新によつていとも簡単に閲覧できなくなる。エネルギー

と想っていたのだが、東京へ行くと野蠻人だと言われた。上州人は単純で竹を割ったような気質。遠大な計画を立てないし、政治的なところが無い。上州からはもつと肚の黒い人が出たほうが良い」。オープンで遠慮がないが、義理人情に厚い上州人。拙文に対して、

きなくなる。エネルギー

約2年間の群馬生活では、多くの魅力的な方々と出会い、刺激をいただいていた。上州人の気質について、萩原朔太郎はこのように述べている。「前

橋にいたときは知識人だ

多くの率直な意見や感想をいただき、有り難かつた。

また逢う日まで、逢える時まで。

中締めは、宴の終わりの儀式であると同時に、つなかりの継続を確認する作業だと言われる。と

いうことで、お祭り男のコラムの中締めだ。

宮 将史(みや・まさふみ)

1974年生まれ。神奈川県出身。一橋大経済学修士。2000年日本銀行入行、24年7月に前橋支店長。今年15日

日から決済機構局参事役。

関心を持って絡んでく

る時まで。

また逢う日まで、逢える時まで。

また逢う日まで、逢える時まで。

また逢う日まで、逢える時まで。

また逢う日まで、逢える時まで。

また逢う日まで、逢える時まで。

また逢う日まで、逢える時まで。

また逢う日まで、逢える時まで。

また逢う日まで、逢える時まで。

また逢う日まで、逢える時まで。

また逢う日まで、逢える時まで。



宮 将史(みや・まさふみ)  
1974年生まれ。神奈川県出身。一橋大経済学修士。2000年日本銀行入行、24年7月に前橋支店長。今年15日